

々者 12 名に行ひ 10 名陰性に、結核性患者 12 名に行ひ 11 名陽性にあらわれたり。従つて結核性疾患に對し特殊性を示すものと認む、尙本反應検査に際し副作用全くなきをもつて或は妊婦の結核症に對し診斷或は豫後に利用價値あるものと信じます。

32. 牛込未就學兒童の集團檢診について

——特に兒童を對象とせるマントウ反應のツベルクリン稀釋度の研究——

東京女子醫學專門學校衛生學教室

吉 岡 博 人
立 野 君 子
諸 岡 妙 子

昨年度に引續き、本年も亦牛込區未就學兒童 1529 名の結核集團檢診が行はれたが、そのうちマントウ反應を施行せる 1502 名について觀察した。

陽性 232 名、疑陽性 9 名、陰性 1261 名にして、陽性率は 15.45%、昨年 14.14%、に比し少しく高い。全兒童の半數に 2000 倍ツベルクリン稀釋液、殘る半數に 5000 倍稀釋液を注射したのであるが、2000 倍液に於ける方が、5000 倍液に於けるより陽性率は高い。但しこの差は誤差の範圍内に入るものである。陽性者の内譯をみるに、2000 倍稀釋液によるものには強度陽性が多く、水泡形成その他の苦痛を伴ふ隨伴症狀が多いが、5000 倍によるものには、輕度陽性が多く、隨伴症狀は少い。しかも 2000 倍、5000 倍の差は誤差の範圍内に入る故、個人の苦痛を除くために、かゝる年齢の兒童に於ては、5000 倍液が適當ではないかと思ふ。但し、昨年本年を通じ、2000 倍の方が、有意ではないが陽性率が高いから、5000 倍液では、2000 倍液で陽性にあらはれたものでも陰性となるおそれがあるから、5000 倍液によるとすれば、判定標準を變へねばならぬとも考へられる。これらの點につき、今後更に研究を續行する豫定である。

幼稚園通否別によると陽性率は、通園せぬものが高率にあらはれ、この間の差は有意であつた。また扁桃腺肥大なきものが、肥大せるものより陽性率高く、この間の差も有意であつた。陽性者中、完全に精密検査を終了せる 202 名については、赤沈速度と胸部 X 線所見との關係のみ有意であり、マントウ反應と X 線所見、マントウ反應と赤沈速度との關係は有意でなかつた。